

view
視野

自然が育む子どもと未来

— 自然とかがわる健やかな育ちを目指して —

大澤力

(大学教員)

はじめに

子どもたちが自然に囲まれ楽しく遊ぶ姿に接するたびに、私は無上の幸せを実感します。子どもの健やかな育ちにかかわる仕事をさせていただいていることに、心より感謝いたしております。

こうした幸せな思いと共に、一方で、昨今の子どもたちの育ちをめぐる環境の動向をかんがえます時……次の時代、果たして本当に人類が幸せに過ごせるように世界は機能し、展開し得るのかどうか？ 幼子は時が経れば、必ず大人となり、次の時代を創造していきます。その時、目の前の子どもたちが、心の底から喜びをもつて、苦勞をもとめせず、次の時代を雄々しく創造する労作活動に本気で取り組めるかどうか？ 正直、昨今の子育てをめぐる状況からは、自信を持って大丈夫だと断言できる裏付けは見当たらないのが現実です。

また、先年「日本創成会議」の分科会が二十〜三十代の女性の減り方などから試算したと

大澤力(おおさわつとむ)
東京家政大学子ども学部子ども支援学科教授。博士(学校教育学)。子どもの自然・環境・持続可能性教育の研究。著書:『幼児の環境教育論』(文化書房博文社)他。

ころ、平成二二年から三十年間、人口流出を食い止める手立てを講じない限り、八九六もの自治体の若い女性の数が半分に減るとされ、そうした都市は、いずれ消滅してしまう恐れが高い「消滅可能性都市」という寒々しい名称が付けられました。このことは、子どもの出生数やGNP（国民総生産）、人口減少や過疎過密といった現象ともかかわっていますが、これら消滅可能性都市は、大都会である東京二十三区や大阪市内にも存在するのです。

こうした厳しい現状を直視すればするほど、子どもの育ちにとって望ましい環境は、すなわち人類の生息にとっても望ましい環境であることを、今改めて問い直す必要性を痛感いたします。さらに平成二七年四月一日からは、新しい子育てにかかわる法制度がスタートしています。特に重要な子育ての場となる幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園などにおける身近な社会環境・自然環境を、幼児教育や保育においてより有効に活用することが、今、切実に求められているのです。本稿では、特に自然環境とのかかわりとしての「自然体験」の持つ意味やそのあり方を述べさせていただきます。

子どもたちにとって大切な「身近な」環境

幼児期の子どもたちが受けとめている環境には、大人たちとは違った幾つかの大きな特徴があるといわれています。その一つ目は、生活圏が狭く小さいということです。そして、成長とともに生活圏は徐々に広がりを見せていきますが、幼稚園教育要領にはこの幼児期の特徴をとらえた「身近な……」といった表現が数多く用いられています。^{注1}

家庭・園・地域社会で形成される「身近な社会環境」

幼児期の子どもたちが受けとめている環境、その二つ目の特徴は、社会環境と自然環境の二つに大きく分かれることです。

家族と過ごす「家庭」は、子どもにとって生まれて初めての温かく・居心地の良い・緩やかな規制のある・小さく・身近な社会環境です。やがて子どもたちは、もう少し大きな社会環境である幼稚園や保育園、こども園といった「園」環境にかかわるようになっていきます。ここでは、家庭にいる時のようなわがままや気ままな行動は、集団生活といった枠で統制されていき、子どもたち一人ひとりが生きていくのに必要な社会性が自らの体験を通して徐々に培われていくのです。家庭や園をも包み込む「地域社会」は、日常生活における家族との散歩や買い物、園への往復や園外保育といったさまざまな場面で活用され、子どもたちの成長や発達に貢献します。

子どもたちの成長・発達に重要な「身近な自然環境」

社会環境と共に、自然環境の重要性は一般に知られています。「幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児心の安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われる^{注2}」と幼稚園教育要領にも記されています。

日本の気候風土がもたらす豊かな四季や生活、さらに繊細で優美な感性も相まって、幼児

期の子どもたちの環境における受けとめ方の三つ目の特徴は、五感（視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚）を多く活用して受けとめることが挙げられます。そして、幼児期の自然体験（自然とのかかわり）では、身近な自然環境を大きく三つの側面からとらえることができ^{注3}ます。

(1) 動物・植物といった「いのちそのものの自然」…

日常保育におけるダンゴムシ・ウサギ・タンポポ・サツマイモなどのかかわり

(2) 地球で生きていくために必要な空気・水・土・熱・光など「いのちを支える自然」…

日常保育における砂遊び・水遊びなどに代表される自然物とのかかわり

(3) 自然現象や自然科学といった身近な環境で起こる「自然の働き」…

日常保育における季節の変化を楽しむことや科学遊びに代表される、不思議で面白い自然の現象とのかかわり

幼児期自然体験の目標・目的

こうした身近な自然と仲良くかかわりつつ幼児期の子どもたちは成長や発達をしていくのですが、長年幼児教育における子どもと自然のかかわりを研究・実践し、『幼児の自然教育論』を著している山内昭道（東京家政大学名誉教授）は、「自然を感じる」「自然を生活や遊びに使う」「自然について考える」といった三つの流れを自然体験で位置付けています。これらはバラバラなものではなく、つながったり合わさったりしながら、「自然を感じ」「自然を扱（使）い」「自然を考える」ことで、子どもたちの「よく感じる心」「よく動く手と体」「よく働く頭」を育み、やがて「自然を愛護する人間」を形成していくのです。^{注4}

人間の一生と地球の存続に重要な「センス・オブ・ワンダー」

「もしもわたしが、すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力をもっているとしたら、世界中の子どもにも、生涯消えることのない『センス・オブ・ワンダー』神秘さや不思議さに目を見はる感性』を授けてほしいとたのむでしょう。」^{注5}

これは、世界的な環境の危機に警鐘を鳴らしたレイチェル・カーソン女史の最後の著書『センス・オブ・ワンダー』にある重要な一節です。彼女が最終的に到達した、人類にとって身に付けるべきものは「感じる力」であり、それは自然体験によって得られるのです。

センス・オブ・ワンダーと原体験 (Protoexperience)

このセンス・オブ・ワンダーでもある「感じる力」と「自然体験」を子どもたちの成長や発達に確実に位置付けたのが、山田卓三（兵庫教育大学名誉教授）です。その著書の中で、「生物やそのほかの自然物、あるいはそれらによって醸成される自然現象を触覚・嗅覚・味覚の基本感覚を伴う視覚・聴覚の五官（感）で知覚したもので、その後の事物・事象の認識に影響を及ぼす体験^{注6}」といった、自然と十分にかかわる「原体験」を提唱しています。

身近な自然を子どもたちと一緒に創り出すビオトープの教育効果

子どもたちの生活する場に身近な自然環境を積極的に創り出し幼児教育に活用するビオトープ（あるひとかたまりの生き物の生息空間）は、大きな可能性を秘めたものです。著者は、

このビオトープに着目し、幼児教育の場で子どもたちに育まれるものを実践研究してきました^{注7}。その結果、日常保育で子どもたちが身近な自然環境と頻繁にじつくりとかかわることによって、安心する（心の癒し）・やる気を出す（意欲の向上）・自信を持つ（自立する心）・他を思いやる（自然を大切にする）・工夫発見する（科学の芽）といった力が育まれることがわかってきました。このことは、自然とのかかわりを核にした成長や発達、人間関係や社会性なども含んだ「全人格的な成長や発達」へと進行することの証なのです。

さあ、身近な自然環境と十分にかかわる遊びを、子どもたちと共にたくさん楽しみましよう！ そこにこそ、輝かしい未来が確実にやって来るのです^{注8}！

引用・参考文献

- 1 文部科学省「幼稚園教育要領」チャイルド本社 一九九八年
- 2 1に同じ
- 3 山内昭道著『幼児の自然教育論』明治図書 一九八一年
- 4 3に同じ
- 5 レイチェル・カーソン著・上遠恵子訳『センス・オブ・ワンダー』新潮社 一九九六年
- 6 山田卓三著『生物学からみた子育て』裳華房 一九九三年
- 7 大澤力「幼児の発達を促す望ましい自然体験に関する一考察——ビオトープを中心とした教育効果の構造的把握による検討——」理科教育学研究第47巻第2号 pp.13-20
- 8 大澤力編著『自然が育む子どもと未来（心を育てる環境教育3）』フレーベル館 二〇〇九年